OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	第７回臨床哲学フォーラムへの感想文②
Author(s)	宮本, 綾
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 65-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90074
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

特集２　第７回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」

第７回臨床哲学フォーラムへの感想文②

宮本　綾

ご講演ありがとうございます。小松原さんのお話しに共感するところが多く、特に、カムアウトする時にハイになる、という経験は共有できるものを感じました。

院生の方々とのやり取りでは、自らの研究を社会制度と接続させるべきか、という趣旨の質問とその応答が印象に残っています。私（わたし）も院生だった時に社会変革と学術研究をつなげて論じたいという問題意識を持っていたので、気持ちはわかるし、そのような研究の意義も理解しています。ただ、無理に研究と実践を結びつけようとするのは、社会もしくは広い意味での“他者”からの評価を気にしすぎている面もあるのではと感じました。これに対する、結びつく時は自然と結びついていくものだ、という回答は、おっしゃる通りだと思いますし、院生の方々にとって胸のつかえがおりるようなものだったのではないでしょうか。

また、スライドのなかで「あなたにはわからない」と主張する当事者に対して緒方正人さんが「それは傲慢だ」と言ったというエピソードの紹介がありました。これを聞いて『同和はこわい考』（藤田敬一著）で論じられている「資格・立場の絶対化」の問題を思い出しました。この問題は何度も立ち止まって考えるべきだと改めて感じています。当事者といっても何かを間違えることはあるし、まったく差別的な振る舞いをしない、ということでもありませんから、“当事者”の言うことを絶対視したり無垢な存在として無批判に称揚したりすることの問題について、特に“支援者”の人たちに考えてほしいです。

ここで、この場をお借りして『当事者は嘘をつく』について書かせていただきたいです。わたしは本書を発売後すぐに手に入れて読み始めましたが、未だに読了することができずにいます。その理由の一つは、以前受けていたハラスメントを想起して辛くなり読めなくなってしまうからです。もう一つは、わたしが言いたいことがそのまま本書に記述されているからです。後者は講演で著書の内容を紹介していただいた時に改めて確信しました。元々、私（わたし）は自身が受けたハラスメント被害を何らかのかたちで告発したいという気持ちがあり、それはいまでも考えています。しかし、本書を読んで、そして今回の講演を拝聴して、＜証言者＞として、もしくは＜告発者＞としてわたしが生きている意味はないなと感じました。告発とは本来誰からも望まれていないはずなのに、ただ自分がやりたいという気持ちだけが先行してなされるものです。その気持ちには＜告発者＞として自分が生きなければならないという気負いが含まれているのではないかと思います。そのような気負いを持たなくてもいい、誰かが語っているのだから一人でやらなくてもいい、というあきらめを小

松原さんのお話しを聞いてつけさせられました。これは本書に対するわたしからの最大級の賛辞であり、このような言葉以外には称賛を表現できないことを申し訳なく思います。

講演後の質問で、ハラスメント被害者が他人に被害を説明する際に気をつけるべきことをお伺いしました。他の質問は研究者や支援者の立場からのものが多く、わたしの質問は場違いだった印象があります。小松原さんもこの質問だけ言葉に詰まっていたので、もしかしたら質問をしない方がよかったのではないかとも思い不安な気持ちです。そのようなわたしに小松原さんは、相手にも深い傷を負わせていくような失敗をしたからこそ語れるようになった、という回答をしてくださり、心持ちが軽くなりました。実際、わたしも失敗して学んでいったような経験があり、一種の“サバイバーあるある”なのかもしれません。最後の質疑応答も含めて、お話しを聞けたことは本当によかったです。

（みやもと・あや）